

音信不通

本のビオトープ

学びあう人々のために

2024. 07. 10 定有堂書店 発行

「わからない」の方へ

「本のある場所」日記 二〇二四年六月

西太平洋を進む

スマホ時代も映える記事

あつみちゃん文庫

善意という名の街

本を作る側から (16)

汽水のほとりから (40)

女もすなるライフスタイルを

因幡に還る (前)

鳥取あれこれ その九十五

内坪井町日記 (2)

「言葉が通じない」妄想

めだか

ご案内

……

編集後記

奈良 敏行

南陀楼綾繁

岩田 直樹

木元 健二

山下 篤美

高木 善祥

村瀬 謙介

小原 修治

萩原 俊郎

ムラカミヒロミ

内田 克彦

齊藤 仁昭

三浦 永理

あきの素生

トラメリア



「わからない」の方へ

奈良 敏行

(定有堂 主人)



本屋の「屋」は、本をもつぱらとして扱うという意味だと、我田引水的に主張してきたが、本を無用にもつぱら読み続けるのも、「本・屋」とはいえないのだろうか。素直に読書のめりこんでいるといえはいいのだが、ながく本屋であり続けた習性が、まだ抜けきらないので、そんな埒もないことを考えている。

本は無用にたくさん読んでいるが、「考える」きっかけになる本にはなかなか出合わない。図書館にも足繁く通うのだが、検索して貸し出している以上、自分の関を越えることはなかなかできない。図書館好きの人たちは、返却本の一時置き場に目をつけ、そこで面白い本を発掘する。他人が見つけた本を再発見するという楽しさがある。

読書の目的は他者との対話だから、他者と出会わないと、なかなか自分の思考の枠を壊すような思索に、出くわすことができない。

本を読む目的を自分の思考の枠組みを壊すこと決めつけているのだろうか。「思考」は効率を上げると言う行く先をもっている。「思索」は自分自身との対話だから、その思索のきつかけは外部からしかやってこない。

先日久しぶりに、思索のきつかけとなるような本を教えてもらえる機会があった。日頃の疑問を質問し、答えをもらい、さらに読むべき本も教わった。数ヶ月に一度くらいしか会えない人なので、この機会に教えを請うた。

小坂井敏晶『答えのない世界を生きる』祥伝社、中島らも『僕にはわからない』白夜書房、鈴木俊隆『禅マインド ビギナーズ・マインド』サンガ(PH)などだ。

「わからない」あるいは「わからなくなる」がテーマの入口だった。「わかる」は結論へ最速で向かう。「わからない」は、寄り道をして迂回する。さてなぜ「わからない」のがいいのだろうか。

《知識の欠如が問題なのではない。反対に知識の過剰が理解の邪魔をする。》(小坂井)

《慣れ親しんだ文脈から問題が切り離され、他の文脈におかれる。脈絡のなかった知識が結びつき、矛盾が解ける。その瞬間、悟りのような感覚が生まれる。》(同前)

読書の仕方に二つの道筋がある。知っていることの上にさらに知識を積み上げていく。いつか量が質に一転する。もう

ひとつは、知っていることを碎き、知らないことへと誘われる。わからなくなることを楽しむ道だ。なぜわからないことの方がいいのだろう。求めているのが無用の読書だからだ。無用の読書は出口へ向かうのでなく、入口へ向かう読書だ。前者を思考と呼び、後者を思索(パンセ)と呼ぶ。

《厳密に考えるなら「生きている」の反対概念は「死」ではなくて、「生きていない」でなければならない。》(中島)

《死という状態は想像力によって想定され得る架空の概念ではない》(同然)

思考は寄り道しない。死が架空の概念という結論は、思考でなく思索だ。本を売る本屋としての四十三年は、最短の出口を求めて思考しつづけた。本を売らなくなつて後の「本屋」人生は、出口を必要としない、無用の読書にひたりつづけている。生命は出口へ向かえば死にいたる。しかし入口へ入口へと目を反転すれば、生命の連続にたやすく気づく。だから「永遠に死なない」と中島らもは発見する。小坂井のいう「知識の過剰」が邪魔をしていたということだろうか。

鈴木俊隆は「初心者の心(ビギナーズ・マインド)」が大切だという。

《いつも初心者でいること、これは諸雲のまぎれもない秘訣でもあるのです。》(鈴木)

《何かを得ようとすると、心はどこか別のところをさまよいはじめます。なにも得ようとしなければ、自分の心身はまさにここにあります。》

《私たちは、今、ここに存在しなければならぬのです。》
(同前)

思考は「わかる」方向へ向かう。思索(パンセ)は「わからない」方向へ向かう。役に立つ有用の読書と「無用の読書」。無用の読書は「本・屋」の読書。わたしの導きの人は、こんな課題を与えてくれたのかもしれない。わからないことを尋ねて、「ここに存在」しつづけてみようと思う。

「本・屋」の読書。「無用」の読書、「初心」の読書、そんな導きの言葉が浮かんできた。

2024.6.25

読書会 『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』

定有堂教室「読書室ヒオトープ」

8月8日 木曜日 第14回 19時から

テキスト 奈良敏行＋三砂慶明

『町の本屋という物語―定有堂書店の43年』作品社
会場 とりぎん文化会館 第6会議室

定有堂教室「読む会」(講師 岩田直樹氏)

7月30日 火曜日 19時から

テキスト 内藤正典『トルコ建国100年の自画像』岩波新書

会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

8月20日 火曜日 19時から

テキスト 浅田彰『構造と力』中公文庫
会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室「読書室ヒオトープ」小説を読む会です

7月9日 木曜日 第13回 19時から

テキスト ヘッセ『車輪の下』光文社古典新訳文庫
会場 とりぎん文化会館 第6会議室

太極拳教室(葉香クラブ)会場 二カ所

毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア

・土曜 13時半から 市役所 麒麟スクエア

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員(奈良)
三段 公認B級指導員(みちる教練)

「本のある場所」日記 二〇二四年六月

南陀楼綾繁

(ライター・編集者)

6月29日

千駄木の〈旧安田楠雄邸〉で、『谷根千の編集後記』（月兎舎）刊行記念トークイベント「雑誌づくりとその町暮らし」を開催した。

1984年創刊の『地域雑誌 谷中・根津・千駄木』は、森まゆみ・山崎範子・仰木ひろみの3人の女性がつくるもので、現在普通に使われている「谷根千」の略称の起源となった。丹念な聞き書きを軸に、歴史、人物、風景、商店など様々なテーマの特集を組んだ。A5判・48〜64ページ程度でモノクロの小さな雑誌だったが、中身はとても濃い。2009年に94号で終刊した。

『谷根千の編集後記』は、毎号の編集後記をまとめたもので、3人（のち、森さんの長女・川原理子さんが加わり4人に）が取材に当たって感じたこと、身の回りの出来事、社会への怒りなどが率直に書き留められている。本書を読

むと、もういちど雑誌のバックナンバーを手に取りたくなる。

同書を刊行したのは、三重県伊勢市で『NAGI』という地域雑誌を発行する月兎舎だ。三重の出版社が東京の1地域の本を刊行するなんて、以前は考えられなかった。いまでも珍しいだろう。

『谷根千』終刊後、山崎さんは大正大学出版会の雑誌『地域人』の編集者となる。私もここで何度も書かせてもらったが、残念ながら昨年休刊した。その休刊の直前、三重県に取材で訪れた山崎さんは松阪市の「御城番屋敷」（武家の長屋）の一軒を借りられることを知り、数か月後に移住する。コミュニケーションの塊りのような彼女は、すぐに地元の人たちと仲良くなる。

一方、月兎舎の吉川和之さんは、『NAGI』読者から送られた『谷根千』全号を読み、関心を抱く。前後して、山崎さんが担当した『地域人』最終号の映画館特集にライターとして関わる。『NAGI』を100号で終刊することを決めていた吉川さんは、山崎さんが松阪に移住した際に「編集後記を本にしたらどうか」と提案。東京の出版社が出せばいいと思っていたが、結局、自分で出すことになったのだ。

今年2月末、私は松阪を訪れ、山崎さんが住む御城番

屋敷に泊めてもらった。その際取材した松浦武四郎記念館や本居宣長記念館も、山崎さんの紹介によるもので、まだ1年経ってないのに多くの知り合いがいることに山崎さんらしいなあと感じた。そのときに『谷根千の編集後記』が出ることを聴き、吉川さんにもお会いした。三重の出版社から出る本が、谷根千の読者に届くようにするために、トークイベントをするほうがいいだろう。だとすると、動くのは私しかない。主催は「不忍ブックストリート」だが、実質一人で準備した。

会場は区の施設も考えたが、大正時代の和風建築で、『谷根千』の活動から生まれた「たてもん応援団」（その中心が仰木さん）が管理する旧安田邸を借りることにした。歴史的建造物のためルールが多く、借用料も公共施設に比べて高いが、ここの雰囲気は捨てがたい。

今月頭に本が刊行されてから、予約が急激に伸び、月半ばには60名で締め切った。旧安田邸のふだんのイベントよりかなり多い人数で設定したので、これ以上入れるわけにはいかず、その後20名ほどの申し込みがあったが、涙を呑んで断った。それなのに、当日7、8名のキャンセルがあったのは主催者としてはつらい。

トークは、前半では山崎さん、版元の月兎舎の吉川さんと坂美幸さんに、刊行の経緯や地域雑誌についてお聞きし

た。後半は森さん、仰木さん、山崎さんの3人に、25年5-間のエピソードや雑誌終刊後の活動についてお聞きした。谷個性が強い3人の息の合った掛け合いに笑いが絶えなかった。新刊や『谷根千』のバックナンバーもよく売れ、大成功のイベントだった。

私が谷根千に住んだのは森さんに原稿を依頼したのがきっかけで、谷根千工房のみなさんにはお世話になった。『ベスト・オブ・谷根千』（亜紀書房）や森さんの『路上のポルトレ』（羽鳥書店）も編集した。来年20周年を迎える不忍ブックストリートの活動も、谷根千工房という先輩がいたからこそまで続いた。このイベントが、先輩へのささやかな恩返しになったらいいのだが。

当日は不忍ブックストリートの実行委員や助っ人さんが手伝ってくれたので、スムーズに運営できた。しかし、全体像は私しか把握していないので、二人から同時に訊かれたりするとテンパってしまう。不忍では長年、企画者と司会者の両方をやってきたが、この歳になると心身ともに一気に疲れる。今後はどっちか一つに絞るべきだろう。

西太平洋を進む ― 洋上での「転回」 (七)

岩田 直樹 (公立鳥取環境大学特任教授・「読む会」講師)

五 船の生活

私は観測計器の見張りをしていた。機器に不具合が生じると担当者知らせるといふ、かなり暇な仕事だ。航海中、故障は僅か一回だった。

少し大きな船では、ワッチ (見張り) が四時間毎に割り当てられる。船の三役 (航海士、機関士、通信士) をはじめ、ほぼ全員がゼロヨン、ヨンパー、パーゼロのワッチを連日行う。それぞれ午前・午後の〇―四時、四―八時、八―〇時の勤務で、例外は船が寄港するときと非常時のみである。

私が担当したヨンパー・ワッチは、下っ端に命じられる過酷であると同時に実にワクワクする任務だった。午前四時から八時、午後四時から八時までの一日八時間、計測機器が正常に動いているか時々確かめるだけで、居眠りや読書、他大学の学生とのおしゃべりで時を過ごした。年功序列なので、もちろんベテランが一番体が楽なパーゼロとなる。

ヨンパーが過酷な理由はいくつかある。未明 (午前三時頃) にゴソゴソ起き出すため睡眠時間が確保できない

こと、午前八時にワッチが終わり朝ご飯を急いで食べてすぐにベッドで横になるので太ること、午後三時近くまで寝るために必ず昼食抜きになること、午後八時に夕食を取り風呂に入ってすぐ寝るので太ること、等々。要するに「食っちゃ寝」の生活だ。地上とは異なるな生活リズムを一ヶ月半続けたのが原因だったのか、帰国して三日ほど高熱で寝込んだ。

四五日間の航海は、食糧や水の補給なしにノンストップでも十分可能だ。しかし、船員としての訓練を受けていない研究者たちが大勢乗り組んでおり、二週間ごとに寄港しなければ精神的に参ってしまう。私たちは、グアム、パラオに停泊した。いずれも、主たる観測地のマリアナ海溝、パラオ海溝が近い。日が沈む前に港に着いて、翌日と翌々日は自由行動、四日目の早朝に出航する。

グアムでは大歓迎を受けた。植民地台湾で高等商業学校の教頭をしていた母方の祖父が存命中で (ちょうど三〇年前に亡くなった)、グアム経済の中心として活躍している教え子たちに「孫が行くのでよろしく」と一報したらしい。その数年前に、祖父は台湾での同窓会に招かれていた。

グアム到着の翌朝、港にキャデラックが迎えに来た。運転するのは高校生二人。祖父の教え子たちの孫で、島

内を案内するようになると言われたらしい。「若い者同士で仲良くしてくれ」との気遣いだった。(二人ともアメリカの大学への留学が決まっていた。)

戦後二八年間もジャングルに潜んでいた横井庄一さんの投降場所へ行ったり、観光客の行かない山中の透き通る池に飛び込んで泳いだり、海岸線をドライブしたりと、あちこちに行った。高台にある高級住宅街の邸宅で少し休み、暗くなると日本資本の一流ホテルに案内された。祖父の教え子たちとその一族が三〇人以上は集まっていただろうか。高級そうな中華料理でもてなしてくれた。北京ダックを生まれて初めて食べたことをよく覚えている。分不相応な歓待であり、大いに恐縮した。

グアム島は沖繩本島の半分より少し小さく、淡路島とほぼ同じ面積である。広大な米軍基地がある点では沖繩とよく似ている。

当時の私は、戦争や植民地に関しては無知のおバカな理系学生だった。その後、植民地支配については、小熊英二『日本人』の境界―沖繩、アイヌ、台湾、朝鮮、植民地支配から復帰運動まで』(新曜社、一九九八年)、

『岩波講座 近代日本と植民地』(全八巻、一九九二―九三年)によって、グアムについては山口誠『グアムと日本人―戦争を埋め立てた楽園』(岩波新書、二〇〇七

年)などで勉強した。

パラオの光景は、今でも眼前にまざまざと浮かぶほどである。パラオは太平洋戦争における最大級の激戦地であった。

日本は、第一次世界大戦が勃発した一九一四年、当時のドイツ領だった旧南洋群島をいち早く占領し、国際連盟委任統治という名目で一九四五年まで支配した。台湾総督府、朝鮮総督府に続き、一九二二年にはパラオ・コロール島に南洋庁を設置。「北の満鉄、南の南興」ともてはやされた国策会社・南洋興発の本拠地として、パラオは大いに栄えた。

私が訪れた当時のパラオ港は、アメリカ太平洋艦隊の拠点の一つであるグアム港とは比べものにならないほどに小さく、白鳳丸が接岸できるか素人目には心配だった。パラオでは行く当てがないので、通信長の高澤豊治さん(二〇〇二年に鬼籍に入られた)に同行した。

車が密林の中に入っていく。観光地ではなさそうだが、何を見に行くのだろうか。五分か十分ほど歩いただろうか。少し開けた場所に出る。神社の跡地だ。「これが南洋神社だ」と高澤さん。鬱蒼としたジャングルの中に忽然と姿を現した鳥居や階段。何かを物語りたくても、沈黙を強いられているかのようだった。

スマホ時代も映える記事

木元 健二

(新聞記者)

何か物足りない気がしていた。転勤で久々に通勤電車に乗るようになったのだが、記憶をまさぐると、思い当たるものがある。週刊誌の中刷り広告である。いまをときめく「文春砲」も、古豪の趣のある週刊新潮も3年前の夏、やめてしまったという。目を引く見出しは禍々しくもあったが、なくなってしまうと妙に懐かしい。

そんな中、時たま、新聞や雑誌を開く人がいると、ほっとする。見回すと周りはスマホを手にする人ばかり。自分だって、すっかり、電子書籍を手放せない「スマホ星人」になっているくせに。長年、職場がその色を帯びてきた「活字文化」の存在を、実感できるからだろうか。

かつては活字文化などと言わずとも、電車内の行きは朝刊やスポーツ紙、帰りは週刊誌や夕刊紙の見出しが、そこかしこにおどっていた。そんな光景はもはや見られない。

さて、その新聞や雑誌の花というと、今も昔も変わらなない。特ダネである。「真実」を知らしめることが、活字文

化をずっと支えてきたのは間違いない。

例えば、調査報道と呼ばれる手法で、権力悪、さらに言えば、声の大きい者の悪事を暴くこと。ワシントン・ポスト紙がニクソン大統領を辞任に追い込んだウォーターゲート事件や、文藝春秋で立花隆氏が展開した「田中金脈問題」などが代表例だ。

そんな硬派な話だけではない。例えば最近で言えば大谷翔平選手の結婚、といった類いもそうだ（あれはどこかが抜いたのだったか。思い出せないが）。

つまり特ダネとは社会的な関心事をつきとめ、つまびらかにすることである。

恥ずかしながら、私はこうした特ダネ報道に加わったことがない。駆け出しの頃、一九九五年の阪神淡路大震災の時は何カ月も現場に出た。九七年の神戸の連続児童殺傷事件の現場は、所轄警察の担当だった自分の持ち場で発生し、「少年A」逮捕の記者会見にも出た。世間の耳目を集める一線にいあわせたことはあったが、いつもその他大勢のひとりだったに過ぎない。

ただ、凡百の私とて特ダネがプロ野球でいう、逆転本塁打や豪速球という位置づけであることは、意識してきたように思う。

思えば、文春砲や新聞、通信社による特ダネは、今でも国内外を問わず、出つづけている。ウェブ上にも特ダネは配信されるが、多くの場合、無料で読める。そして、その発信元は新聞社や出版社という、古くからのプリントメディアがほとんど、といっている。

簡単に言えば、タダで見られるネットでしか、多くの人は情報を追わなくなったのだ。「プラットホーム」などと呼ばれるサイトを開けば、タダで知りたいことを知ることができる。例えば、朝日新聞は朝夕刊セットで月額四千九百円、週刊文春は一号五百十円。そんな購読料を払うなどムダ、と受けとめる人が増え続けている。

こんな私が記すのもなんだが、特ダネを放つ側の会社も大変で、人手も経費もかかる。苦心の末、その成果が出せても、部数は減少していくばかり。これでは活字文化は衰退してゆくばかりである。

近頃、朝日新聞の「声」欄への投稿文（五月九日付）に目がとまった。長野県に住む、生花店経営の父によるものだ。長女が一番望んでいた大学に進み、大阪に旅立ったことに寄せた。まじめで気の利く子だったが、中学生の頃、摂食障害と診断され、高校二年の夏には一カ月、入院した。家族は不和となつてしまい、怒り、うそ、涙が伴う生活に

なつたという。

〈だが彼女は長い長い闘いをくぐり抜け、振り切つた。

（略）彼女の机には、私と妻への手紙が残されていた。これまで死ぬほどつらかったこと、心と体にしみ込んだ経験を武器にかえて社会に生かすこと、そして、これからかならず幸せになる、との決心が書かれていた。妻は息が止まりそうなほどに泣いた〉

そのうえでこう結ばれている。〈育てさせてもらつてありがとう。がんばれ〉

妻子のいない私だが、この短い文章に打たれた。とりわけ「妻は息が止まりそうなほどに泣いた」という文章は、この父にしか書けないであろう。

声は読者による投稿欄ではある。ただ、こうした偽りのない人間模様を伝えること。それも新聞の大切な役割ではないだろうか。記者が取材を尽くし、当事者しか知らぬ話を引き出す。言葉を選び、そうとした書きようのない記事に仕上げる。それは電子版であれ、紙面であれ、心に響くものだ。はやりの、エモい記事などいらぬ。

新聞記者になり、三十年。五十代半ばになつた今、坂を下りながらできることはないか。梅雨時の混み合う車窓から、晴れ間をのぞんでみる。

あつみちゃん文庫

山下 篤美

(今の夢は魔女)

定有堂、入り口入って正面すぐの低い本棚の上に、薄いピンク色の桶が何十年もぶら下がっていたのに、お気づきの方はいらつしやったでしょうか。すっかり風景と化していたかもしれないんですが、あの桶には「あつみちゃん文庫」と下手くそな赤い文字が書かれていました。そして、それを書いたのが、私です。

20代の、ただただ情熱しかなかった私に、一体全体何を見いだされたのか「本の紹介をしてみませんか」、奈良さんがあの柔和な笑顔で声をかけてくださいました。お調子者は、ろくに考えることもなく、易々とそれを引き受けました。それから、心にひっかかる本を気ままに取り上げ、それについての雑文を書き、あの桶に入れさせていたいただいでおりました。

しかし、その後しばらくして、勤めていた会社を辞め、海外で日本語教師になることを夢見て、上京することに。「大事なのは場所じゃないんですけどね」奈良さんは、そ

う言って、学ぶ予定の学校以外、何も決めていない無謀な私に、大学時代の友人の編集プロダクションをバイト先として紹介してくださったのです。

それからの私は、東京でそれでも何とか無事に日本語教師になり、中国・ハルビン、そして長年ロシア各地での暮らしを経験することとなりました。

生活の拠点を国外に持つてしまっただけからは、鳥取は数年一度帰省するだけの場所に。それでも、気になる本や、娘たちのために絵本を求めに定有堂に立ち寄ると、例の桶がいつまでも変わらずに、そこにあるのを目にしていました。

果たして奈良さんはいかなる思いをもって、或いは惰性で、そしていつまで桶をそこに吊るしておかれるおつもりなのか、その真意を図りかねないまま、自分でピンクに塗った桶を不思議な思いで見ただけです。

やがて、あんなに行き当たりばったりだったあつみちゃんも、今や還暦。すっかり老眼が進んで、活字中毒だった昔がうそのよう。殊に文庫本の字を追うのがつらくなってからは、文字より動画を見る時間のほうが多くなっています。

ここ最近よく見ている動画が、山田五郎氏の「オトナの教養講座」。実はどうにも人の名前を覚えるのが得意で

はありません。特に外国人の名前が苦手。世界史の成績がパツとしなかつたのも、そのせいだと思うのですが、まあ、それはさておき、そんなこんなで美術史なんかとんでもないと思っていたのですが、五郎さんのおかげで、少しずつそれに馴染みが出てきました。もともと還暦祝いの「赤」は結構好きな色で、ワンピースやらセーターやら以前から色々持っているし、記念には別の何かをと、皿やら、時計やらの物品を購入。そして、書籍部門に選んだのがコレ「美術の物語」（エルンスト・H・ゴンブリツチ著、河出書房出版）でした。帯には世界一売れている美術史の本。35か国で翻訳。累計800万部突破とあります。

ロシア・サンクトペテルブルグ市在住だった頃には、歩いて行けるところに「エルミターージュ美術館」がありました。色の魔術師と言われる大好きなマチスに、その気になればいつでも会える、そんな贅沢な時間を過ごしていました。特にコロナ禍の冬の美術館は、観光客がめっきり減って、「ダンス」の前では、その絵を独り占め。ぼーっと座ってあの絵からパワーをチャージしていました。あんなに満ち足りた時間はもう二度とないのだらうな。絵を正面に見据えた私の背中の写真を見る時、その充足感と共に過ぎた時間を思い返しています。

鳥取に帰ってきて、もうすぐ3年。残念ながら、現実の

美術の世界は、少し遠のきました。今はこの本を頼りに、知識の裏付けをしてみようという気持ちになっっています。猫をひぎに乗せ、分厚い本をゆっくり読む、そんな穏やかさも年と共に手に入れました。

「締め切りは25日です。書けるでしょう」相変わらず穏やかなのに、きつぱりと揺るぎない奈良さんの言葉に乗せられて、今回こちらに寄稿をすることになりました。昔と違って「馬鹿がばれるから緊張する」と娘に言うところ、「自分が馬鹿だってわかってるだけマシじゃない」と有難い励ましのお言葉。昔のような情熱は失ってしまったけれど、ちよつと人をびっくりさせたい、そんな気持ちが残っているのが今の自分です。そして海外で日本語教師になりたいという、一つだけでも夢が叶ったから、贅沢は言うまいと思いつつ、人生後半、今の目標は「素敵な魔女になる」です。そこには「美術好き」というキャラも加えたい。

それにしても、ここに集う皆さん！奈良さんの勧誘マジックですごくないですか。魔女の卵としては、原稿を書く代わりに、何としても、そのテクニクを自分のものになりたいと、密かに企んでいる次第でございます。

Town Called Goodwill 善意といふ名の街

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

店がオープンしてから二週間ほど経ったころ、年配の男性がフラツと店に来られました。「古い本ばかりだけど、ほしいものがあれば譲ってあげるよ」と言われたので、日程を調整して倉庫代わりに使われているビルにうかがいました。昭和の作家の小説やエッセイ・文庫などを、二箱ほど持ち帰らせていただきました。

本を箱に詰めている間、しばし世間話をしていたのですが、「このビル、一階はリフォーム済みでテナントに入ってもらってるんだけど、二・三階は最初の家主の家財道具もそのまま残ってるし、雨漏りもあるから手放そうと思ってるんだよね。タダで良いからどう？」と、予想外の展開に。

土地と建物はタダでも、手続きや税金・改修に維持管理費も掛かるわけで、当然そんなお金は持ってません。とはいえ面白そうな話なので、とりあえずビルを案内していた

いただきました。二階が主な居住スペースで、水回りと居間に和室が二つ。三階は部屋が三つ。

一階正面はテナントが入っているので、裏に回って今の地主さんが事務所として使っているところも見せてもらいました。

そこにはなんと半地下スペースが！

ホームバーとして使われていたとのことで、不要なものを片づければ、ムーディで楽しい空間になるのでは…とお金もないのに夢想してしまいました。

さすがに自分の手には負えないので、お世話になっていた不動産屋さんや建築家の方に話を振っておきました。

某月某日。朝お店に向かっていたら、同年代の男性に声を掛けられました。

・この通りにある、親戚が持っていた空き家を相続した
・その付近の空き家二軒と、智頭街道沿いの物件も二軒買った

・鳥取出身だが大学から県外に出て二十年以上経っているので、土地勘が鈍ってる

だそうで、

「テナントか住宅として賃貸に回すか、リノベして民泊として使うか、潰して駐車場にするか…。この周辺での

需要ってどんな感じですかね?」

と聞かれました。

・街中に住みたい方は一定数存在するが、駐車場を別に借りる必要があるので、相場より若干低めの家賃設定が良いのでは

・同じく街中でお店を始めたい方も一定数いるので、店と居住スペースが確保できれば需要はある

・家賃を低めにする代わりに、残置物の撤去は借りる側が負担する代わりに、DIYは自由にやってもらってOK
・シェアハウスは市内にもいくつかあり定着したが、ブームとしては下火

・観光客は戻りつつあり、特にアジアを中心に海外から来られる方も増えて、滞在日数も長くなっている。民泊は市内でも少ないのでアリかも

といった話のほかに、銀行や行政の反応や、まちづくりの功罪について議論。気づいたら小一時間経っていて、「月に一回は鳥取に戻ってきてるので、また今度ゆっくりお話を聞かせてください」というところに落ち着きました。

不動産という大きな買い物であっても、需要と供給のミスマッチはあって、お店を始めて一カ月しか経っていない自分にも、いろんな相談事が舞い込んできます。

出版・書店業界では、「棚貸し書店は本屋か否か」と13-

いう議論がされて、本屋の定義づけがもはやSFレベルで面倒くさいことになっています。個人的にはどうでもよくて、本と本、本と人だけでなく、人と場所もつなげられたら楽しいよね、で商いをする所存です。

ただし「本はひとりで読むもの」というスタンスは変わりません。

【参考文献】

満園勇『商店街はいま必要か』講談社現代新書

巨大資本のコンビニが、どこまでローカライズされていくのか…?

関満博『地域を豊かにする働き方』ちくまプリマー新書
そうありたい。

石山さやか『サザンウィンドウ・サザンドア』祥伝社
新しい、団地マンガ。

定有堂ビル2階

古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS

店主 高木善祥



SHEEPSHEEP BOOKS

本を作る側から (16)

村瀬 謙介

(小取舎)

先日、何の気なしにテレビをザッピングしていると、おそらく初めて観るであろうBS放送大学というチャンネルでリモコンを操作する指が止まった。画面の左上にテロップで「災害社会学」と出ており、右側には男性、その下に「関西学院大学教授金菱清」の文字。なぜそのチャンネルでストップしたのか。それはその金菱清なる人物が「幽霊」について語っていたからである。あとで調べると放送大学の災害社会学の講義全一五回の内、一回目のテーマが今回観た「幽霊」であった。怪談だのホラーだの番組は、今でもたまにBSでは放送されているがどうも趣が違う。まず「幽霊」、「関西学院大学教授」「災害社会学」の三つが結びつかない。訳もわからず聞いていると、映画化もされ大ヒットとなった漫画『寄生獣』の話が出てきた。泉新一という高校生の主人公が未知なる寄生生物に体内に侵入されるが、完全に乗っ取られることを防いだため、手を組み、他のパラサイトと対決していく漫画だ。その中で泉が公園で瀕死の犬を介抱するシーンがある。しばらくして

その犬の命が尽きたとたん、ひよいと持ち上げ近くのゴミ箱に捨ててしまう。ガールフレンドが見ており泉に「可哀想じゃないの!」と問うが、泉は「もう死んだんだよ……死んだイヌはイヌじゃない。イヌの形をした肉だ」と答える。この主人公は生と死の境界線がはつきりしており、むしろ周りの人間の価値観のほうが曖昧であるのではと考えさせられる。金菱教授は、通常、人間の死に対して遺族は葬儀をはじめとした数年にわたる儀式により区切りをつけている。しかし、大災害の遺族の視点からみるとどうしても納得できない気持ちや、医学的な死が確定しない行方不明者に対しては区切りの付け方が曖昧で複雑になる。

この授業の内容はこのように記してある。

「なぜ被災地では幽霊への接触を忌避するのではなく、むしろ歓迎しているのだろうか。行方不明者を多く抱えるような大震災では、未だ彼岸にいない死というものを考えざるをえない。行方不明は亡くなっているのか生きているのかわかない状態が長期にわたって続く。生者と死者のはざまをむすぶ曖昧な領域にある不安定で両義的な生/死を無理になくそうとはせず、曖昧なものを曖昧なまま生と死の

中間領域を肯定的に対処するために当事者たちは自ら工夫している。」

そこで気づいた。「この話、知っているぞ」。そう思っ
て番組を見ているとやはり聞いたことがあった。東北学院
大学震災の記録プロジェクト 金菱清（ゼミナル）編の
『呼び覚まされる霊性の震災学 3・11生と死のはざま
で』という本の著者だ。少し前に何かの番組で紹介されて
いた。本の帯が強烈にキャッチーだったので覚えていた。

「タクシードライバーが邂逅した幽霊現象 わが子のよう
に慰霊碑を抱きしめる遺族たち」

放送から数日後、本を図書館で借り読んでみた。第一章
からゾツとする。東日本大震災以降、東北の被災地を中心
に怪奇現象の体験談や噂話が溢れかえったのだが、とりわ
け宮城県石巻市において件数が多く、異質なのがタクシー
ドライバーたちが体験した話である。夏場に真冬の格好を
した客を乗せ、更地について振り返ると客はいないという
話がたくさん出てくる。「私は死んだのですか？」と聞い
てくる客もいたそうだ。他の噂話とは違い、タクシードラ
イバーはお客を乗せた段階で「空車」から「実車」にメー

ターを切り替えるし、実際に走行するので燃料も減る。GPSや無線での記録も残るので信憑性が高い。（向こう側の）彼らは恨みよりも無念という思うが強いと思われ、いつでもつかまり、個室であるタクシードライバーを媒体として自分の存在をアピールしたのではないかと一章の著者、工藤優花氏は推測している。しかも体験した運転手の多くは恐怖より畏敬の念を抱く方が多かったのだ。これは、「死は別離ではなく、コミュニケーションの方法や関係性の変化にすぎない。生者と死者は常に共存しており、共同体を守り、繁栄させる。自分が死んでもまた、子孫たちとともに生き続ける。肉体というかたちを失うにすぎない死は、恐れる対象にはならない」（岩崎大『スマホと哲学』二〇二一年）という死生観が、おそらく原始の時代から遺伝的に我々に組み込まれているからなのかもしれない。

霊感を全くといって持ち合わせていない私だが、不思議な縁やら、輪廻も信じざるを得ないような妻の先祖との不思議な共通点などは多い。この本と番組に出会えたのもたまたまだったのか。

汽水のほとりから (40)

小原 修治

(県立高校教諭 湯梨浜町松崎在住)

先日、倉吉市内で『戦雲(いくさぐむ)』という映画を観た。とはいえ、映画館ではなく、市立図書館の上にある交流プラザの一室で、一日限定の上映会で観たのである。この催しを企画したのは、上映実行委員会を起ち上げた「沖繩に連帯するとつとりの会」の有志の人たち。自分も會員の一人で案内していただいたのだが、恥ずかしながら何も手伝っていない。会の中心メンバーは退職された方々で、彼らが元氣なうちは自分は端から静かに応援したいと考えている。特に会費は無く、カンパを募るだけの良心的な会なので、ぜひ多くの人に興味を持っていただきたい。

さて、今回観た映画は、沖繩と戦争をテーマに映画制作を続けてきた三上智恵監督の新作である。前作から六年、その間に沖繩本島・宮古島・石垣島・与那国島の南西諸島でどのような事態が進行したか。その現地取材が映画にまとめられている。タイトルの「戦雲(いくさぐむ)」とは、

戦の前兆としてあらわれる不吉な黒い雲のことで、その言葉通り、南西諸島では今、戦争が始まるかのような事態が進行中である。具体的に言えば、どの島にも自衛隊によるミサイル基地建設が強引に進められており、それに対して島民から不安や反対の声が上がっているのである。

そもそも基地問題は、原発問題と同様、国全体の問題を一部の地方に押し付けようとする理不尽さを抱えている。国は常に国防の観点から戦時体制を想定する傾向にあり、逆に、市井の人々はそうしたことを考えない傾向にある。ある意味で、平和とは、人々が戦時体制について考えずにすむ特権を享受している状態とも言える。が、先の敗戦の教訓は、戦時体制のあり方、平和のあり方について考えることを国に委ねてはならないということではなかったか。であれば、基地問題のような高度に政治的な問題についても、私たちは人民として主体的に決めるべきなのである。もしそうでなければ、主権在民の理念は端的に嘘である。が、残念ながら戦前と同様、現在も戦争と平和について主体的に決めるのは、人民ではなく、政治家や官僚である。南西諸島で自衛隊がミサイル基地建設を進める背景には、令和4年12月に彼らが決定した所謂安保三文書がある。この時のスピーチで、岸田総理は「戦後の安全保障政策を大きく転換するものであります」と語っているが、まさ

にその通り。安部内閣時の集団的自衛権行使容認に続いて、この時また憲法九条を骨抜きにする重大決定がなされたと言える。ミサイル基地建設はこれ以後の動きだからだ。

ちなみに、安保三文書とは、①「国家安全保障戦略」②「国家防衛戦略」③「防衛力整備計画」のことで、簡単にネットで読むことができるので、ぜひ御覧いただきたい。

①は日本の安全保障の指針を定めた最上位の政策文書、②は防衛の目標と手段を示した文書、③は自衛隊の体制などを示した文書である。この三文書が「戦後の安全保障政策を大きく転換するもの」である最大の理由は、「専守防衛」に徹する従来の方針を覆し、持たない立場を堅持してきた「反撃能力」を持つとしたことだ。「反撃能力」と言えば聞こえは良いが、これは「敵基地攻撃能力」のことである。

南西諸島のミサイル基地が極めて危険な理由もここにあり。これまで自衛隊のミサイル防衛を柱とする体制は、あくまでも相手がミサイルを発射した後、それを迎え撃つというものだった。これは攻撃を受けた時にはじめて必要最小限の防衛力を行使できるとする「専守防衛」の考え方を前提としていた。対して、安保三文書が新たに容認した「反撃能力」すなわち「敵基地攻撃能力」を行使するとは、相手がミサイルを発射する直前に相手のミサイル基地を攻撃できるということである。が、もしその判断を誤れば、こ

ちらから先制攻撃を仕掛けて戦争を始める恐れがある。

なお、安保三文書においては、日米同盟の更なる強化が謳われている。戦争と平和の問題について人民が主体的に決めるべきと先に述べたが、戦後日本においてその最大の障壁が日米安保の問題であったことは疑いない。60年と70年の二度の安保闘争敗北の歴史は、戦後日本において主権者であったはずの私たち人民に、戦争と平和の問題について主体的に決めることを諦めさせるのに十分な影響を与えたと言えよう。が、日米同盟の強化は、米国からの自立にはつながらず、むしろ国の主体性をも奪うものだ。戦後の日本は戦時体制のあり方、平和のあり方について長らく米国に依存してきた。それは今も変わっていない。が、現在の世界各国のパワーバランスは、米国に依存する陣営とそうでない陣営（ロシア・中国・北朝鮮など）とが真っ向から対立する構図に変わってきている。安保三文書が新たに提起された所以である。我々は今や戦前と同様、国が主導する戦時体制に組み込まれつつある。南西諸島で進行している事態は、まもなく我々の現実になるだろう。

女もすなるライフスタイルを

萩原 俊郎

(倉吉市在住者)

会社を辞めてから感じ始めたのは、「家事は楽しい」ということだ。近ごろ中高年向けの「男の料理教室」といった催しを見かける。「いぎ独りになったら困るのは男性でしょ」というのだが、失礼を言っちゃあいけない。困る女性もいっぱいいる(はずだ)。

昔から夢だった「毎日、自分の食べたい料理を作る」のも楽しいが、お気に入りの食器や台所用品、家の中(インテリア)、庭回り(エクステリア)、服装や小物にいたるまで、要するに家事を通じて「自分の身の回り」を整える、というより「自分好み」にどんどん変えていく。

わが家はカミさんが一階、私が二階、互いに干渉しないシエアハウス(口の悪いヤツは「明るい家庭内別居」とも言うが)みたいになっていて、彼女の工房を兼ねた居室はさながら「南洋の動物王国」のような風景である。

朝・昼食は別々で、夕食だけ彼女が二階のわがダイニングを訪ね、私の作った料理と酒を楽しむ。「部屋、きれいになったわねえ」などと(同じ家に住んでいるのに)褒められる。時々、逆に彼女の「動物王国」にお茶で呼ばれることもある。

◆ ◆ ◆
思えば昔は、仕事で「男も家事・育児に参加」などとエラそうなことを新聞に書きながら、家庭ではお父さん、お母さん、見えない「分業制」が横たわっていた。家庭の構成員として「分(ぶ)」をわきまえる」、そう思って互いにガマンしていたところがあった。

残念なのは、子育ても終わって、今のような「自由な老後」を迎える前に、お母さんⅡ前のカミさんが病気で亡くなってしまったことだろう。53歳だった。

音楽や服、インテリアの趣味など、彼女にはずいぶん影響を受けた。美大出で自由奔放なサーファー・ガールだった。生きていれば、さぞかし私とは違う型破りな老後の「ライフスタイル」を作り上げたに違いない。

◆ ◆ ◆
ライフスタイルといえば、本屋に行くとき必ず「ライフスタイルのコーナー」というのがある。

「55歳、小さなひとり暮らし」「60歳からの生き

方図鑑」「ものも家事も最低限、ミニマルに暮らす」「6歳、まずやってみる 人生を愉しむシンプル暮らし」。老後を迎えても、質素だけどおしゃれ、充実感があって、ちよっぴり優雅な生活が送れますよ、ちよっとした知恵と決断であなとも手が届きます、といった本や雑誌の数々。

「古民家に住む」「毎日を楽しむ捨てない暮らし」など日本の伝統的な暮らしを志向する一方で、「フランス暮らし十二カ月」「フィンランドのライフスタイル」「イタリヤ人が教えてくれた美しい暮らし方」と、やはり憧れはヨーロッパにある。最近はどこに北欧が人気。

ところで、ふと売り場で気づいた。これらの本や雑誌には、まったく男性の「立ち位置」が見えない、いや存在感、気配すらない！彼女たちのライフスタイルの一角に、はたして男たちは棲息しているのだろうか。

そもそも、書き手そのものがほぼ100%、女性で占められている。ライフスタイルに男は無縁なのか。

◇ ◇ ◇
冷静になって考えると、これらのコーナーの本や雑誌を求める客はほとんど女性であって、だから「需要と供給」の問題なのだろう。

ライフスタイルの先駆者といえば、洋のル・コルビジエ、和の北大路魯山人、戦後は白洲次郎や『ヴァン・ジャケツ

ト』の石津謙介、映画監督の小津安二郎、伊丹十三など、錚々たる男性陣がいる。彼らは建築、陶芸、映画といった専門分野だけでなく、服装から家のたたずまい、料理、ちよっとした小物まで自分で選び、あるいは作った。

もちろん『サライ』『男の隠れ家』といったオジサン雑誌も彼らを取り上げるのだが、きまって「至高の銘品を愛した」特別な方々に描かれ、女性たちのように、『私たちの「ターシャ」を探して ターシャ・テューダー（※米国の絵本作家・園芸家）に憧れてその生き方や言葉を胸に前向きに暮らしを楽しむ十軒を訪ねました』（主婦と生活社、女性のライフスタイル本はだいたい題名が長い！）といった「あなたにも手が届きます」という世界と違う。

台所に立ち、家具や服選びに悩み、時に美味しい和菓子を探す旅に出る、シンプルだけど手作りの暮らしを楽しむ……ここはひとつ、紀貫之の『土佐日記』ではないが、「女もすなるライフスタイルを、男もしてみむとてするなり」。それが男性の老後を豊かにする近道である。

因幡に還る（前）

ムラカミヒロミ

（フライング・ブックマン）

六月一日、誠にユニークなコンサートを聴いた。

伊福部昭記念館のオープンに先駆けて行われた開館記念コンサートだ。

伊福部昭の資料館ができる、それも鳥取に、という正月のニュースは驚きだった。

生前に、音更町図書館に記念資料室ができ、没後には、楽譜や明清楽器コレクションなど多くの資料が奉職先の東京音楽大学に寄贈され、散り散りになってしまふのを聊か残念に思っていた。

尾山台のお屋敷も取り壊され、記念館は無理かと寂しく感じていたのだった。

それが、事もあろうに、当地にできるといふのだから、欣喜雀躍、これに勝る喜びはない。

鳥取駅から単独路線のバスで三十分少々。段々、街並みが疎らになり、田園地帯を抜け、山深く分け入る感が強くなってくる。予め承知している地元民でさえ、これは大変な所だ、と感じるのだから、都会から来た人は、ずいぶん心細い思いをするのではないか。本当に、このバスでよかったのかしら…。

記念館は門を兼ねた納屋と母屋と蔵から成る、この辺りでは典型的な農家の佇まいである。

玄関に近い一階の三間を、襖も障子も取り払って、コンサート会場に充てていた。冠婚葬祭で人が集まる時のやり方である。

資料室は準備中らしく、隣接する小部屋に、楽譜整理キヤビネット、当日演奏されるソナタの楽譜（氏自身による自家製本）、様々な肖像写真、愛用のリュート、螺鈿の小物入れや置物、茶器、書籍類（著書『管絃楽法』の新・旧版や『ブリタニカ』など）が所狭しと並んでいた。

演奏は、『因幡万葉の歌五首』のヴァイオリン&ピアノ編曲版（初演）で始まった。

会場は二方が大きく、ガラス戸で、外は晴天。庭の先は畑で、その向こうは野坂川の清流。対岸は、山裾が迫っていて、緑滴る明媚なる風光に、心が洗われる。

集まった人々は、招待の音楽関係者の外、子供を含め地元の人々が大勢で、クラシックは初めて、という人も少ない。

おぼちゃんたちは世間話に余念がなく、東京からの参加者が窘める場面もあったが、放っておいても良かったのではないか。最後に披露された地元の河内手踊りなどを見るにつけ、地域挙げての催し、村のお祭りのイベント、という位置付けに思えてきたのである。

恐らく、作曲家が存命ならば、このような形を喜んだのではなからうか。

民族のアイデンティティは、地面を通じて、足の裏から伝わり染み込んでいく、と語った人だ。アイヌの人々に交じり、その歌や踊りを心底楽しんだ人である。地域と一体化した音楽会こそ、伊福部音楽に相応しいものではないか。

普段、我々は、クラシックをオペラシティやサントリー・ホールのような立派なハコでしか聴くことがない。それはそれで意味があるけれど、服装を改め、居住まいを正し、咳をするのも遠慮しいしい「拝聴」する、の感も残る。

コンサートの後、椅子を片付け、長机を運び込み、立食パーティーとなった。設営も、手作り料理の配膳も、みな地元の人たちがテキパキとこなしていく。もう、間違いない村の〈惣事〉（そうごと）である。

タケノコやインゲンの煮つけ、コンニャクとサトイモの田楽、ちらしずし、おこわ等々、素朴な田舎料理を中心にしたメニューに、水ようかんや初物のスイカなどのデザーにも抜かりなく。各テーブルに、小さな紫陽花の一輪挿しが飾られているのも床しい心配りである。

地に足のついた音楽とは何かを考えさせられた有意義な一日であった。七月一日が記念館の正式オープンである。（七日まで一般公開。以後未定）また出掛けようと思っ

伊福部昭記念館

住所：〒680-1425 鳥取市河内 361

電話：090-8580-0405

mail: akira@ifukube.net

鳥取あれこれ その九十五

内田克彦（地域研究家）

中田吉雄は、一九三〇（昭和五）年四月、京都帝国大学農学部農林経済学科に入学、主任教授は橋本傳左衛門、育英資金の学資の保証人になってもらう。一九三三年三月の卒業間際、食糧庁に就職が内定していたが、湿性肋膜炎を発症し、長期の療養生活に入った。

病癒えたのは一九三八（昭和一三）年。同年の『農業と経済』十二月号には「昭和十三年の農業経済学界を顧みて」と題する論文が「京大農林経済学教室」の名で載っている。「助手で暫く勤務」（『中田吉雄の生涯』五六頁）とある（「副手」カ、同二四〇頁）。橋本教授の配慮により『大阪府近郊農村人口の構成と流動 第二巻』（帝国農会、一九三九年）を発行、多少の手当てを受ける（同二四二頁）。

総裁が近衛文麿の「東亜研究所」が発足したのは、一九三八（昭和一三）年九月。「橋本教授のお世話で就職」（同二四二頁）とある。「駿河台二ノ一」の住所で、明治大学の道を隔てた北隣にあった。『東亜研究所報 第三号』（一

九三九年九月）の中の「東亜研究所業務報告」の「庶務日誌抄」の七月一日の項に、「資源課ノ新設」として「課長（兼）第一部自然科学班主事 柘植秀臣」の名前に続いて「課員（兼）第一部自然科学班員」で吉雄の名前が載っている。柘植は親の代から、尾崎秀実と深い関係にあった。柘植『東亜研究所と私』には、次の記述がある。残念ながら『大蔵公望日記』には関係する記述がない。

大蔵（公望副総裁）は非常に顔の広い人であったから、東研開設とともに方々から入所の依頼をうけたらしい（略）私の属する自然科学班には池田善長（略）、中田吉雄（京大農学部出身、農業経済、たしか邦（ママ）須皓教授推せん？）の二人を採用するように、私が大蔵副総裁から直接依頼をうけ、両君が自然科学班員になった。二人とも有能な調査マンであった。

那須皓は、当時東京帝国大学教授で、日本農業経済学会の創設に関わり、一九三七年には石黒忠篤・加藤完治・橋本伝左衛門らとともに「満蒙開拓青少年義勇軍編成に関する意見書」を政府に提出している。橋本教授が那須教授に吉雄の東研への就職を依頼したものであろう。

柘植著には「自然科学班の調査項目」として、「海南

島の農業 中田吉雄 16・3」と「北支に於ける黄土
地域及その中央亜細亜との關係 中田吉雄・新井浩 1
4・6」が掲げられている。

「ある人の世話で」（同五六頁）正子と一九三九年一
月に、橋本教授夫妻の媒酌により京都で結婚式を挙げた。
吉雄が明記しない「ある人」の名前は推測するしかない。

正子が筆記試験に受かった一九三七年九月二三日付夕
刊『東京朝日新聞』には、「麹町区九段四ノ八鈴木法律事
務所に通つて仕事の実際についてゐた」、同『読売新聞』
には、「弁護士鈴木義男氏から弁護士の『実習』を受けて
ゐるといふ」とあり、合格した翌年一月二月付夕刊『読
売新聞』には、「九段の鈴木法律事務所で実地を勉強する
かたはら母校の女子経済専門学校の講師として親族法、相
続法の教鞭をとつてゐる」とある。

『鈴木義男』（伝記刊行会、一九六四年）に、田辺繁子
による次の記述がある。なお、鈴木義男は、「若い時代に
「女子経済専門学校」の講師を買つて出られた」（『文化
生活』一九六九、三）ともあるが、昨年刊行の評伝『平和
憲法をつくつた男 鈴木義男』にはいずれの記述もない。

〔鈴木義男〕先生は、女性の地位の向上、女性解放の23-
ためにいつも力となつていて下さつていたことがわか
ります。女性高文司法科。パス第一号の中田正子さんも、
先生のところでお勉強なさつたとのこと〔略〕

一九三九年一〇月現在の女子経済専門学校教員名簿に
「法律 同校卒（高等試験司法科合格）田中正子」とある。
『われらの弁護士会史』（第一東京弁護士会、一九七一
年）には、次の記述がある。

久米〔愛〕は有馬忠三郎を、田中（のちに中田と改姓）
は堀江専一郎を（弁護士試験の）指導弁護士として、昭
和15年6月修習を終えた。

堀江は一九三九年六月二五日に死去しており、翌一九四
〇年六月二五日付『大阪毎日新聞』の次の記述が正しい。

堀江博士の法律事務所で学び、博士がお亡くなりになつ
たあと今の岩田〔宙造〕博士の事務所で一ケ年半の弁護
士試験を勤め本年六月の試験を通じてこの廿五日か
ら正式の弁護士になれるといふわけです

内坪井町日記

(2)

齊藤 仁昭

(ケバブジョンソン・

元長崎書店勤務)

五月末日

今年もやってきました氷室祭。いつものごとく夜中までの勤務だったが、今年では会社の近くに宿を確保していたので運転せずに済む。帰りの運転のことを考えなくていいとなると気が楽で、伸び伸び働くことができた。八代に部屋を借りた方がいいのかもしれない。

0時過ぎに退勤後、八代駅併設のファミリーマートで弁当を買って、宿で食べたらずぐ寝ようと思っていたけれど、駅との併設だからなのか0時に閉まっていたようで、晩飯を食べそびれる。すすすこしよぼくれて宿に向かい、寂しく大浴場で風呂を浴びて就寝。週に何回かここに泊まりたい…。

あつという間に一年が経っている。私は成長していないが、次男は4歳の誕生日だった。帰れないので祝ってあ

げられなかった。毎年祝ってあげられないのかと思うと悲しい。

六月某日

渋谷セブンスフロアにて北里彰久さんのバンドとケバブジョンソンのツーマン。楽しみなのと緊張とないませ。精神的にはいい調子である。イベント名は「ロック&ステディ」。いいね。

ライブの前日まで十何日かの連勤だったので、体調が不安な状態で当日の朝に東京入り。そのままスタジオに向かい練習して会場へ。久しぶりに仕事が休みなので、少し気が抜けてしまい、足腰に疲れが出てきた。だるい。寝たい。会社しばらく休みたい。ドーピングにキューピーコーワゴールドを飲む。

北里バンドの手練れたちのリハーサルを見て、緊張してきた。音像が、プロフェッショナルだ。しかし、自分たちのリハーサルも快適だったので落ち着く。こちらはピザールではあるが。リハーサルのうち、北里さんたちとご挨拶。ジェントルメン。

お客さんたくさんだったが、楽しく演奏できた。杉浦くんは生ピアノだったのでいい音。もっとピアノでライブしてみたい。

北里さんの新作は、とにかく声が孤高で、ひんやりした感じがするのだけれど、他者を拒絶する感じはしないところが凄いなと思っていた。ライブでのボーカルも素晴らしかった。バンドは特に潮田さんのギターが素晴らしかった。作曲もかなり独自のアプローチで一貫しており、一貫しているあまり新作アルバムではカヴァー曲がなくてもよかったのではと思うほどだった。

終演後、物販コーナーで北里さんのCDを買いにきた方に、延々とアルバムの素晴らしさを述べたり、北里さんやメンバーの方々、お客さんといういろいろなお話ができてよかった。とても良かった。このまま東京に住みたい。毎週ライブしたい。

帰り道の渋谷は、観光客と若者と中年と、とにかく酒で乱れていた。金はあるところにはあるが、ないところには全然ない感じで、しかし元気はあった。やや興奮した。どうなっちゃうのかなーこの街この国。

六月某日

一瞬と永遠、もしくは永遠と一瞬は同じこと、とか暇で文字ばかり読んでた学生もしくはニートのころは、川を眺めていたりするときにくっきり悟りそうになってしまったものだが数秒で我にかえってしまい、そういう隅々まで

25-
掌握したような感覚は儂く消え去ってしまったものであったが、我にかえれなくなるのが悟りで、場合によっては発狂に見えるのかも知れない。認識の隅々が詩的、詩によって隅々まで認識することは、どんなこと？ 鈴木清順のただ狂えて言葉を折りに触れて思いつくのだが、近頃は狂った人も少なくなっているような。と言うよりも、発狂している、と思うもしくは思われる閾値が低くなりすぎて、自分が発狂していると思われたくないという恐れが充満しているのか。それってカルトに流されやすいような。でも自分も狂う勇気がない。何を守ると言うのか。ただの保身。

六月某日

日曜だということに出勤して出張販売。今月は三日しか休みがなかった。余裕がなく、原稿もとても遅くなってしまった。膝が痛む。子と妻はプラネタリウムに行くとのことで、お父さんも行きたいです。

本日、六月三十日をもって、長崎次郎書店が休業。あくまで「休業」とのこと。どうするだろうなる。

「言葉が通じない」妄想

エクソフォニーを考える

三浦 永理

(青翔開智中高教員)

「言葉が通じない」という妄想に襲われることがある。これは幼い頃の体験が原因かも知れない。

今の私は言語に関わる教員であるにもかかわらず、小さな頃の私は、「言葉が遅い」子どもだった。とはいえ、自分なりにはしゃべっていたようで、幼稚園の先生からは、「今日もいろいろしゃべってはくれていたんですが、何言ってるかわかりませんでした」と言われる始末だったそうだ。確かに小さな頃の記憶を振り返ると、自分が話したことをうまく理解してもらえないで、そのまま進んでいく場面が多い。当時、母親は私の発達をかなり心配したらしいが、小学校に入学すると突然授業中に手を挙げ続けて発言するようになるのだから、人生はよくわからない。

おそらく、誰にでも、他者と出会い、伝えたいことが伝わらずに苦しむ時間があったはずなのだが、そんなことを忘れてしまって、いつの間にか手に入れた母語を当たり前

の道具として使っている。まるで自分の一部のように。

外国語を学ぶことは、そんな不自由に改めて遭遇することでもある。

私は、大学で^①実施学部に進学した。これは、英語を教授言語として授業を実施する学部のこと、日本にいなから、英語での講義、ゼミ、レポート提出を行っていた。

そんな^②実施学部の実態に迫る新書が出た。『英語ヒエラルキー グローバル人材教育を受けた学生はなぜ不安なのか』(佐々木テレサ・福島青史)である。著者の佐々木氏は、私と同じ学部の出身者であり、解説を添える福島氏は、鳥取県米子市出身で、長く日本語教育に関わっている。と、いろいろと縁を感じた一冊だった。佐々木氏は、日本各地から英語に自信を持って進学した人たちが、^③実施学部で、ネイティブや、英語が流暢な帰国子女たちを含む英語力の「ヒエラルキー」で自信を失い、果てには日本語や日本の文化に対しての不安にもつながる可能性を指摘する。タイトルには「英語」とあるが、日本語教育の修士論文が元となっている一冊だ。

私の場合、英語は好きだったものの、自分以上に英語が得意な同級生がたくさんいるような高校だったため、英語自体に過剰な自信はなかった。案の定、学部に入ってし

まうと英語の講義がわからない日々が続く。教授とインド人の留学生が笑っている。けれど、何が面白いか全然わからない。意を決してしゃべってみても、「言葉が通じない」こともある。とりあえず、締め切り通りに課題を出したので、成績だけは完璧には理解できていないのに良かった。

ふと、他の学部の授業を受けたり、日本語で実施された統計学の授業に入ったりすると、耳から自然に言葉が入ってくることに驚く。たとえ教科書の別のページを開いていても、話の内容がわかる日本語。一瞬でも「どういう意味だ？」と止まってしまえばそのまま置いていかれる英語。日本で教育を受けながら、混乱の中にいた。

大学二年。留学先は、あえて日本人が多くない場所を選んだ。怒涛のオリエンテーションでは、自分の日本人風の名前が全く通じなかった。おしゃべりするにも、道を尋ねるにも、ひとまず共通言語の英語を使うしかない。その日の帰り道のバス停で、「英語を喋らないと生きていけないな」と強く思った。

そうやっていくうちに、英語で文句を言えるくらいには成長した。そして、日本語での表現は少しだけ乏しくなる。クロアチアのプリトヴィツェ湖群国立公園のエメラルドのような青い湖を前にしても、チェコのプラハの悠然たる

街並みを見ても、「すごい」しか言えなくなっていた。

ただ、日本語はしばらくすると私の一部として再び戻ってきた。結局、私自身は、日本語の不自由さをあまり大きく感じないまま、社会人生活を始めて、今に至る。

透明な道具と化した日本語の一方で、私が書く英語の文は稚拙で、文学的な響きがほとんどない。これでは、私の背骨にはならない。日本語が失われてしまえば、私の多くの部分も失われることになるだろう。

言葉が通じない側になること。越境すること。

母語の外に出た状態一般を「エクソフォニー」という。日本人でありながら、ドイツ語でも執筆活動を行う多和田葉子氏は、『エクソフォニー 母語の外へ出る旅』というエッセイ集を出している。『地球にちりばめられて』から始まる長編三部作では、突然島国である母国を失った *Stranger* という女性が出てくる。彼女はオリジナルのパンスカという言語を作ることで、生き延びる。

「言葉が通じない」という経験は、自動翻訳などの技術によってなくなるかもしれない。

けれども、最初に手に入れてしまった背骨となる言語から、人間は逃れえないのではないだろうか？

めだか

あきの素生

(くうねるめがね)



ひよんなことから、めだかを飼っている。最初は一匹だけ、見よう見まねで世話をしていた。水槽ではなくガラスの鉢に、小ぶりの炭と、杉の葉を浮き球で束ねたような産卵床が入ったシンプルな設え。めだかはたまに鉢の側面に向かって激しく泳ぐ。ガラスに映る自分と終わりのない闘いを繰り返していったのかもしれない。もう四年くらい生きていて、でも、飼い方を調べるときに見かける写真の中のめだかと比べると、うんと痩せた、小柄なめだかだった。

世話の仕方に慣れ、鉢の中の環境がある程度落ち着いてきた頃、もう一匹めだかを飼うことにした。環境が変わることで、めだかにどんな影響が出るか未知数だったし、新入りをいじめたり、先述のとおり小柄なため、逆にいじめられたりしないかと心配で逡巡したが、ガラスの中の自分とばかり向き合っているめだかを見て決めた。ホームセンターで買って来た子はまだ少し小さく、水合わせして鉢に

放したあとも、自分の置かれた環境が変わったことにびんと来ていないような風情で、却ってゆうゆうとしていた。

子どもの頃、家で金魚とどじょうを飼っていた。えさをやるとき、えさの入った容器を振ると、金魚は水面までやってくる。どじょうもやってきていたような気がする。池で手をたたくと鯉が寄って来るあれと同じだろうと、子どもながらに解釈した。さきやかにもコミュニケーションが成立すると、かわいさがぐんと増す。水槽の掃除やなんかは父が一手に引き受け、自分はえさをやるくらいだったが、金魚もどじょうも大事に思っていた。

その記憶から、最初はめだかにえさをやるときも、えさの袋をしゃしゃかと振っていた。めだかは音に驚いて逃げ、えさが落ちてきたことに驚いてまた逃げた。少しの間続けていたが、金魚とは違うのかな、と、めだかをいたずらに驚かすことはやめて、必要最低限の音を立て、そつとえさをやることにした。

元いためだかは食が細く、えさの食べ方もうまくない。えさより手前で口をぱくつかせたり、一度口に入ったえさを水と一緒に吐き出したりするものだから、もつと落ち着いて食べな、とやきもきした。そして、まだちよつとし

か食べていないのに、ふーっとえさから離れる。まるで、食欲という煩惱から解き放たれているかのような。どんどん痩せていくようで心配だった。

対して、後から来た子はよく食べた。多数のめだかと一緒に暮らしていたせいか、隙あらば食べる、何でも食べるといった具合に、したたかさとかくましさを兼ね備えていた。食べるのがとても上手で、えさをひとつぶずつ確実に口に入れる。見ていて気持ちがいいほどに、えさを残らず平らげた。

かくして、したたかであくましいめだか(新)はみるみる大きくなり、めだか(元)を追い抜いた。それどころか、攻撃をしかけているような様子も見られて、何かしら対応しなければと気を揉んでいたところ、ある日、めだか(新)が卵を産んでいることに気が付いた。

長く一匹で過ごしていためだか(元)が親になることがうれしく、なんとか孵化してほしいと素人ながらに手をかけてみたが、なかなかうまくいかない。うまくいかないとなると躍起になって、あれこれと情報を集めては実践した。情報を集めれば集めるほど、これはどうなっているのだろう、あれについても調べなければと、どんどんめだか沼にはまっていった。

卵や卵付きの産卵床を入れた容器に、びろびろと動き生きものを見つけたときは、小さく悲鳴を上げた。めだかの赤ちゃんは「針子」と呼ばれるそうだ。針のように細く、とても小さい。生まれた日をカレンダーに書き込んだ。

一匹生まれると、針子はどんどん孵化した。めだか(新)も毎日のように卵を産んだ。この頃になると、めだか(元)も(新)に負けじとえさに食らいつくようになった。そして、えさの袋を開けると、その音を聞きつけるのか、水面に、私に向かって近づいてくるようになった。(元)も、(新)も、「これはえさくれるめがね」とでも思っているような面持ちで、ぴこぴここと近づいてくる。時間はかかったけれど、少し通じ合えた気がした。

急に暑くなった日、めだかはいなくなった。(元)も(新)も一度に。果然とした。今もきつと果然としている。めだかたちのことをぼつんぼつんと思ひ出しながら、残った針子と卵を育てている。

つい先日、卵や卵付きの産卵床を入れた容器にびろびろと動く針子を見つけた。また小さく悲鳴を上げた。

奈良敏行十三砂慶明編

定有堂教室案内サイト (@ドラメリア)

『町の本屋という物語 定有堂書店の43年』

作品社 本体2200円 46判上製

ISBN978-4-86793-013-7

発行 2024.2



ご案内



ドラメリア (座敷わらし)

定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

7月30日 火曜日 19時から

テキスト 内藤正典 『トルコ建国100年の自画像』 岩波新書

会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

(講師 岩田直樹氏 公立鳥取環境大学特任教授)

8月20日 火曜日 19時から

テキスト 浅田彰 『構造と力』 中公文庫
会場 とりぎん文化会館 第5会議室

定有堂教室「読書室ヒオトープ」小説を読む会です

7月9日 木曜日 第13回 19時から

テキスト ヘッセ 『車輪の下で』 光文社古典新訳文庫
会場 とりぎん文化会館 第6会議室

太極拳教室(葉香クラブ) 会場 二力所

毎週 水曜 19時半から 市役所 麒麟スクエア

・土曜 13時半から 市役所 麒麟スクエア

講師 日本武術太極拳連盟 四段公認A級指導員(奈良)

三段 公認B級指導員(みちる教練)

・編集後記:

最近、小部屋で仕事をするようにしています。一畳ほどの、机にパソコンを置いて自分が座るのがやっと、という小さな空間。いろいろなことはできないと思っていたけれど、案外このぐらいが誘惑が少なくてさくさく進むような気もしてきました。ホテルに缶詰になって(というか、されて) 作品を書き上げる作家の気持ちが少ないような、この頃。
家では捗らないんだ、誘惑に負けてしまうんだ、だって猫がかわいいんだもの。
ドラメリア(編集長)

編集部の隣が「SHEEPSHEEP BOOKS」。ほぼ毎日のぞいています。古書がぞくぞく充実しています。この町の人たちが読み継いできた本だと思うと一層関心が深まります。百円均一コーナーも豊富。『聖徳太子はいなかった』と『テロルの系譜』を買いました。
奈良敏行(発行人)